『おおざっぱな爪』

A・C

「レジ袋はご利用ですか。」

僕はいつもこの応えに戸惑う。カゴを持っているときはそんなに多くなかった品物たちも、レジに通していくうちに

（あれ、こんなに買ったのか）

と毎回思う。一応マイバックは持っているけれど

（入りきるかなあ。でも、一枚五円って少し高い気がするし。よし、今日は要らないな。）

「お願いします。あ、Ｌサイズのやつ。」

僕は驚いた。だって明らかに僕の声だったから。でも、僕は「要らない」というつもりだったし、ましてや口も動かしていない。僕は不思議に思いながらも、お会計を済ませてＬサイズのレジ袋に購入品を詰め込んだ。

（おかしいなあ、そんなに疲れたのかな。無意識って怖いな。）

と自分を納得させようとしている時

「ほら、やっぱ要るやろ。見てみい。そのでっかいキャベツどうするつもりやったんや。マイバックに入らへんやろ。」

今度こそ本気で驚いた。僕の声が僕の左手の人差し指から聞こえたのだ。僕は左人差し指の腹に一生懸命耳を当てた。ここから聞こえた気がしたのだ。

「ははは、そっちちゃうって。逆や、逆。爪や。爪の方見てみ。」

爪側を見ると、僕の方を見つめるつぶらな瞳と目が合った。そのつぶらな瞳からは考えられないコテコテの関西弁。ケラケラと笑う口。そう、僕の左人差し指の爪が自我をもって話しだしていたのだ。

（なんだこれ、気持ち悪い。）

「気持ち悪いはひどいなあ。結構かわいい顔してるやろ。この顔気に入ってんねん。」

（僕の心が読めるのか、こいつは。いや、そもそもなんで爪が話しているんだ。）

爪が話し出して一週間が経った。僕はこのしゃべる爪に慣れた。僕は自分でも驚く程この爪に心を許していた。こいつは、しゃべるとうるさいが、結構役に立つ。だって、マスクをしているこの時代、僕は話す必要がなくなった。爪が話してくれる。しかも、僕より爪の方がよっぽどおもしろい。他にも僕は「優しい」とか「器が大きい」とか言われるようになった。どんな事に対しても、「それでええやん。」「もうそれでいいんちゃう。」って爪が言うからだと思う。はじめは、この爪のおおざっぱさとか無責任な発言が腹立たしかった。しかし、実際救われたことも多い。以前の袋が必要かどうかの時や、友達にどっちが良

いか訊かれた時など。こんな感じの小さな質問にいちいち悩むストレスが無くなった。

ある日、爪が言った。

「あの子のこと好きやろ。」

図星だった。爪は僕があの子を好きなことを分かって、ちょっかいをかけていた。爪は調子に乗って毎日その子と話すようになった。正直嬉しかった。僕は何もせず立っているだけであの子は笑ってくれるし、おもしろいと言って大笑いしながら腕をタッチしてくる。その度に僕はドキっとする。爪も話を聞いてくれて笑ってくれる人がいて嬉しそうだ。遂に爪はその子をデートに誘った。

デート当日。映画館の入り口で待ち合わせをして、そのまま映画を見た。映画の上映中、爪はうるさかった。約二時間静かにすることなんてこいつにはできなかった。

「なあ、なんでここ、こんな静かなん。」

「これいつ終わるん。」

（もう本当にうるさい。あの子も、映画一本も黙って観られない僕に驚いている。いや、引いているじゃないか。）

さすがに僕は焦って心の中から爪に訴え続けた。爪はおもしろがってしゃべり続ける。腹が立った。僕はひと思いに爪を折った。

映画が終わった後、あの子が

「おもしろかったね。」

と言ってくれた。

（良かった。嫌われていない。）

あの子が

「どうしたの」

と訊く。

（あれ、声ってどうやって出すんだっけ。）

『絶対優先座席』

M・M

カードを拾った。それは上司の機嫌を伺いつつ後輩が犯したミスの尻拭いをする地獄のような勤務を終え、帰りは満員電車の中で気の遠くなるような感覚に襲われた、いつも通りの帰り道だった。

家の手前にある暗くて狭い路地にそいつは落ちていた。何故か素通りできなかった。手に取ってみると、黒くざらざらしたカードで、真ん中には白い文字で「絶対優先座席」とあり、裏面には

『電車でこのカードを額にかざし、座席に座っている人に向かって「絶対優先座席」と唱えると唱えられた人は席を離れます。』

と書かれていた。読み終えてすぐ、ああ、誰かがいたずらで置いたのだろうとそう思った。そう思うと、仰々しい字体や少し何かを期待していた自分にもだんだん腹が立ってきた。さっさとそこら辺に捨てて、早く家に帰ろうと思ったが、それもなんだか違う気がして、乱暴にズボンのポケットにそれを突っ込んだ。

それから少し経ったある日、いつものようにうんざりしながら帰りの満員電車に乗り込むと、お腹の大きな妊婦が座れずに立っていた。人酔いしているのかどこか顔色も悪かったため、誰か席を譲らないのだろうかと狭い身を少しひねって周りを見てみると、大きく足を広げて誰かと電話しているプリン頭の小汚い男が目についた。周りの人たちもその男が気になるようでちらちらと様子を伺っていた。だんだんその男の態度に腹が立ってきた俺は、ふとあのカードのことを思い出した。ズボンのポケットを雑にまさぐると、しわくちゃになったそれが出てきた。半信半疑だったが、興奮状態にあった俺は勢いよくカードを額にかざした。

「絶対優先座席。」

そう唱えた俺はハッと我に返り、急いでそれを丸めてポケットに押し込んだ。恐る恐る男の様子を見ると、さっきと何の変化も無くぺちゃくちゃと唾を飛ばしていた。やっぱりいたずらだったのかと思い肩を落とした矢先、男はおもむろに立ち上がり次の駅で電車が止まるとそそくさと出ていった。そのぽっかり空いた席には妊婦が座り、周りには安堵したような空気が流れていたが、俺は驚きを隠すのに精一杯だった。

それからというもの、俺の毎日は変わった。絶対優先座席のおかげで、満員電車の中、立ったまま揉みくちゃにされることは無くなった。上司に阿ることも、足手まといな後輩も怖くなくなった。これはきっと今まで頑張ってきた俺への神様からのご褒美なのだろう。席に座れる、ただそれだけで毎日幸せを感

じた。憂鬱だなんて思うことは無くなっていた。そんなある日、俺はいつものように満員電車の中、絶対優先座席を使って席に座っていた。その日はいつも以上に疲れていたのか、席に着いてからはずっとウトウトしていた。最寄りの3駅前を知らせるアナウンスでふと目が覚めると、目の前のつり革に掴まっているやつがやけに近くに立っていることに違和感を覚えた。気付かれないようにちらっと相手を盗み見ると、どこか見覚えのある顔だった。「あのときの男だ!」と俺はその男のプリン頭を見て確信した。同時に男も俺の視線に気づいたようで、ニヤリと気味の悪い表情を浮かべ、金色の何かを手にしてこう言った。

「絶対絶対優先座席。」

『非常食用生物』

M・M

「新たな防災として非常食生物を常備することが正式に義務化されることとなりました。」

一年前、出勤準備のＢＧＭに流していたテレビからそんなニュースが流れた。それから世界の日常は大きく変わった。

まず、この非常食用生物のために物置に使っていた貴重な一部屋を飼育部屋にしなければいけなかった。私が配布所で選んだのは「大きくて安心、深海魚タイプ」というもので、正直可愛くない。しかし、配布所で大量に残っているのを見てしまい、可哀想でつい選んでしまったのだ。それに所詮は非常食。食べるならかわいくない方が後々辛くない。つい最近までそう思っていた。

部屋の中はほとんど水槽と、餌やりのために水槽の横に取り付けた階段で埋まっていた。

階段を登ると、そいつは底から水面まで上がってきて餌の催促をしてくる。全然かわいくなんてないのに、目尻が下がっている自分が水面に反射している。階段の一番上に腰を下ろすと同時にため息がこぼれた。

「いや、餌は？」

「……は？」

声が聞こえた。上京してから非常食用生物のあいつが来るまで一人暮らしだったこの家で、聞いたことがない声が聞こえたのだ。有り得ないと思いながらも水槽を覗き込んだ。

「餌。腹減ってんだけど。」

「……これは、新しいわ。」

喋る非常食用生物だと分かってから、あいつとは色んな話をした。ちょっとした身の上話だとか、会社の愚痴とか、今まで一人だった分話題は尽きなかった。

今日はどんな話をしようか。どんな話が聞けるのだろうか。階段を上りながら考えていた時、下から突き上げられたような揺れを感じた。

あいつは大丈夫だろうか。

自分のことなんかより非常食用生物のあいつの心配をしている自分がいた。急いで階段を上りきり、水槽を覗き込んだ時にまたも大きな揺れがきた。

あいつは今日も餌の催促をしていた。

『電球ペット』

S・M

一人暮らしをし始めて数週間経った頃、僕は車でペットショップに向かった。昔からの憧れだったペット。一人暮らしになったら絶対にペットを迎えようと心に決めていた。入店して真っ先に向かったのは電球売り場だ。ここの棚に座っている電球の誰かが、今日から僕の新しい家族になる。

電球は、犬猫の次に人気のペットで、一般的なペットショップなら大体売られている。飼育も簡単で、お金もかからず、一人暮らしや飼育初心者でも育て易いため、三年ほど前から一気に人気ペットの一種になった。しかし、僕が電球をペットに選んだ一番の理由は、死なないことだ。切れた線や割れた部分は交換可能で、もし全身が粉々になってしまっても、欠片を再利用して新しいからだを作ることができる。ペットとの別れが何よりも嫌だった僕にとって、死ぬことが無い電球は最適のペットだった。

座っている電球たちの中から、一番きれいで可愛い子を選び、飼育セットと一緒に家へ連れて帰った。家についた直後は緊張しているようで、表情がこわばっていた気がしたが、少しすれば新しい場所に慣れたのか、元気そうに光っていた。その日はずっと彼を眺めながら名前を考えていた。唯一無二の変わった名前を付けようかとも思ったが、呼びやすく分かりやすいことが一番だと考え「ポチ」と名付けた。彼は犬ではないけれど、おなかについている丸いボタンに「ポチ」という響きがよく似合うと思ったからだ。今日は「ポチ」も色々あって疲れただろうから、少し早めに寝かせることにした。ベッドへ連れて行き、ボタンを押すと、「ポチ」の明かりは消え、大人しく眠りについてくれた。僕はこれから始まる「ポチ」との生活についての想像が止まらず、あまり眠ることができなかったが、人生で最も充実した夜だった。

それからの「ポチ」との生活は毎日楽しくて仕方がなかった。目を覚ましてすぐ「ポチ」の姿を見ると、毎日が幸せだった。どんなにつらいことがあっても家に帰って「ポチ」と遊ぶと、悪いことなんて思い出せなくなる。透き通ったガラスの中で光る「ポチ」の明かりが愛おしくて仕方がない。話しかけても返事の声が帰ってくることはないけれど、音がなくたって「ポチ」が僕の話にうなずいたり首をかしげたりしている様子が分かった。

数年経った今ではすっかりなついてくれて、日を重ねるにつれて「ポチ」への愛が強まっていった。

ある日の朝、いつものように「ポチ」を起こしても、目を覚ましてくれなかった。何度ボタンを押しても反応しない。原因はすぐに分かった。「ポチ」の体の寿命が尽きたのだ。電球ペッ

トは体の寿命が尽きても、経年劣化した部分を取り換えることができ、また寿命を延ばすことができる。「ポチ」の体に寿命があることを知っていたし、寿命が尽きたら病院で部品を取り換えてもらうことも当たり前だと思っていたけど、その行為が現実味を帯びてきた今、彼の体を取り換えるなんてことを受け入れられなくなっていた。「ポチ」の体はひとつしかない。それが変わってしまったらもう「ポチ」ではないのではないか。冷たい「ポチ」の体を手に乗せると、目の前が真っ暗で何も見えなくなった気がした。

何日も考えて、僕は「ポチ」の死を受け入れることにした。電球ペットは死なないなんて嘘だった。せめて彼が安心して旅立てるようにと葬式屋に電話をした。しかし、電球の葬式は受け付けていないと断られた。一般的に電球ペットは死なないとされているからだ。だから葬儀のプランも用意されていない。僕は家で一人「ポチ」の葬儀を行った。僕以外に彼の死を認めて悲しんでくれる人はいない。ひとりぼっちの葬式は、彼が生きていたことまで否定された気分が増しただけだった。

「ポチ」を亡くして気付いた。電球は、犬や猫などのペットより、圧倒的に権利が認められていない。動物保護法も適用されないし、虐待しても罪にはならない。電球ペットだって、他のペットと同じように死ぬし、同じように生きている。そのことを一人でも多くの人に理解してもらいたい。その一心で僕は電球ペット保護団体を創った。電球の権利についての改善を求める活動をしている。まだ理解を得るまでには時間がかかるかもしれないけれど、亡き「ポチ」のためにも僕は今日も活動を続けている。

『にわとりになる叔父』

M・S

「気を付け！　礼！！」
チャイムに引けを取らないその声で目が覚めた。
「早く昼ご飯食べようぜ。もうお腹ペコペコだよ。」
これまた眠気を吹き飛ばす大声でタカシが駆け寄って来た。
たしかに今日はいつにも増してお腹が減っている。それに何か……
「あ！」
「なんだよ急に大きな声出して。」
タカシが目を丸くして訊いてきた。
「弁当が無いんだ。」
昨晩夜更かししたせいで、今朝は寝坊したのだ。遅刻は免れたものの、あまりに急いでいたから玄関に弁当を置き忘れて来てしまった。僕が落ち込んでいると
「しょうがないなぁ、購買に行くの、ついて行ってやるよ。」
弁当を口に詰め込みながらタカシが言った。
「ほら！　はやくしないと無くなるぞ。」
僕は走り出したタカシを追いかけた。しかし、一足遅かった。購買にはほとんど何も無く、あるのは三口で食べ終えてしまう程度のパンが一つだけ。食べ盛りの中学生男子には、とてもこれだけで午後を乗り切れそうにない。そんなことを考えている僕の目の前に
「ほら、俺の弁当分けてやるよ。」
とタカシがおかずを幾つか取り分けてくれた。僕はありがたく食べさせてもらった。たまご焼きを口にしたその時、今まで感じた事の無い感覚が僕を襲った。
「これ、何なんだ？」
と僕が訊くと
「うまいだろ。俺も大好きなんだ！」
とタカシは笑ってそう答えた。
「どうしてこんなに美味しいんだ。」
と僕が訊くと、秘密は叔父にあると教えてくれた。
「タカシの叔父さん、農業してたんだ。」
と僕が言うと
「違うよ、叔父さんはただのサラリーマンだよ。」
とタカシは僕に言った。理解できずに困惑していると、タカシは続けて
「だから、叔父さんが産んだ卵なんだよ。」
と言った。僕の頭は余計にこんがらがった。僕はタカシに質問し続け、どうにかタカシの主張を理解した。タカシの叔父さんは寝ている時ににわとりになることがあり、卵を産むらしい。しかし、誰がそんな話信じられるだろうか。

「叔父さんはそのことをどう思ってるの？」
タカシを嘘つき呼ばわりするつもりはないが、探るように訊いてみると
「叔父さんはそのことを知らないし、叔父さんの普段のことは俺はよく知らないよ。」
とタカシはいたって真面目な顔でそう答えた。
「どうして？　そんなことあり得るの？」
と僕が興奮気味に言うと
「じゃあお前は自分の寝てる姿を見たことあるのか？　それに自分が寝ている時に姿が変わっているって知ったら誰だってパニックになるだろう。だから叔父さんには言ってないんだよ。」
とタカシはあたかも常識かのように僕に説明してきた。まだ訝しげな表情の僕に
「現にお前だってさっき居眠りした時……」
とタカシが何かを言いかけたとき
「おーい。二人ともサッカーしに行こうぜ。」
と呼ばれ、僕たちの会話は途切れた。タカシが何を言いかけたのかは分からないまま。